

週日の説教

金 大烈 神父 2010年6月18日(金)

《自分の光を活かす》

古本や古雑誌、使わなくなったものなどを売る店を『古物商』と言いますね？

あるところに、開発によって大きく広がった町がありました。その中心には商店街があり、真ん中に古物商がありました。その古物商は、町が開発される前からありました。しかし、周りに新しい店が建ってきれいな商店街になると、周りの店の人々はその古物商が真ん中にあることが気になり始めました。「あの古物商がなければもっと街がきれいになって、もっとお客さんが来ると思うのに、なぜあの古物商は立ち退かないのか。」と苦情を言うようになりしました。しかしその古物商は他の店とは違って、いつも明け方にだけ開店します。だから、街の人にはお店に人がいるのは見えません。ただ“明け方になると物を売り買いしている”という噂が聞こえるだけでした。商店街の人が店の主人に会おうとしても、会うことが出来ないので、不満だけがたまり、市役所などにも苦情を言いに行くようになりしました。

そのような中で1人の人が、「なぜ、この古物商は明け方にだけ開店するのだろう。」と気になり、電話番号を調べて電話をしてみました。「実は、私の家にも古雑誌や古本があります。それらを売ろうと思うのですが、いつ行けばよいのでしょうか？」と聞いてみました。すると無愛想なおじいさんの声が「明日の朝早く来てくれ。」とだけ答えて切れました。“物を売りたい”というのは言いわけでしたが、店に入って雰囲気を見たかったので、その人は翌朝早く、本や雑誌を持って古物商へ行ってみました。すると、すでにたくさんの腰の曲がったおじいさんやおばあさんが集まっていて、いろいろな物を古物商の主人に買ってもらっていました。電話をした人は、雑誌や本をトラックいっぱい持って行ったのですが、たった2000円にしかありませんでした。朝早くから苦勞をして、誰が読んでも大丈夫そうな本や雑誌をこんなにたくさん持って来たのに、たった2000円にしかならないことに、少し腹が立ちました。しかし周りを見ると、おじいさんやおばあさん達は200～300円のお金しかもらっていませんでした。それでも機嫌よく、「ああ、今日は350円儲けた。」などと笑顔で話し合っていました。それを見たその人は、“自分が間違えていたのかもしれない”と思えました。そこで、店の主人のおじいさんに聞いてみました。「この店は、なぜ明け方にだけ開店するのですか。昼間開けてくだされば、こんなに苦勞をしなくてもよいのに。」と。それを聞いた店の主人は、このように答えました。「昼間も開けたことはあるのですが、今はもうそれができません。なぜならば、この店を売ってほしいと言う人がたくさんいるからです。私ももう高齢なので、この店を売って楽な生活をするほうがよいのではないかと思ったこともあります。しかし、毎朝このように集まって来る人々を見たら、私にはそれができませんでした。たった200円、300円ですが、彼らにとっては命に関わる大切なお金になるのです。私はこの店を売って別のところに店を開いてもよいのですが、このお

じいさん、おばあさん達にとっては、この古物商が希望になるのです。だから私はこれ売ることができなかつたのです。」という話でした。

美しい話ですね。この世の中には、いろいろな汚いこともあるし、人間と言えないくらい悪いことをする人もいます。しかし、この話のように、表面的には優しく見えなくても、人々の心を温かくする人がいます。だから、この世が保たれるのではないかと思いました。

今日の福音(マタイ 6・19 23)の話に入ります。イエス様を信じている私たちは『光の子』と言われています。しかし、信仰を持っているか持っていないかにかかわらず、この世の中の全ての人は光を持って生まれていると私は信じています。その光を活かそうとするのか、自分の光を消すだけでなく他人の光さえ消そうとするのかによって、私たちの人生は全然違う生き方になるのではないのでしょうか。よく考えてみますと、私たちは本当に素晴らしい光を持っています。その光を活かそうとするのが、自分にとっても意味があり、生きがいを感じられる人生になるのではないのでしょうか。

皆様、毎日いろいろなことがあります。しかし、自分の中の光を大事に活かそうとする生き方、その光が他の人々をも癒すかもしれないという希望を持つ生き方をしましょう。それが一番必要ではないかと思います。

ありがとうございました。